

初期ケインズについて

——「確率論」をめぐる——

喜久川 宏

はじめに

ケインズ著作集全30巻が、1989年に完結、刊行されたことにより、改めて、ケインズ研究の動きがみられる。⁽¹⁾

ケインズの伝記が相次いで発表されていることもその一端である。⁽²⁾

ケインズの「一般理論」は1936年に発表されたが、その経済理論及び現実の経済政策に対するインパクトは強烈なものであった。特に第二次世界大戦後の1945年以降、戦後復興の時期を越す1960年代後半にかけては、主要各国の経済政策はケインズの経済思想をガイドラインとしていたことは否むべくもない。然し1970年の初頭より、特に日本を始めとする幾つかの先進諸国が高度成長を示すに至り、ケインズ的政策主導が後退し、マネタリズム

的政策の主張が見られるようになった。⁽⁴⁾

理論面では、1960年代より、両ケンブリッジの分析枠組を統一理解しようとする、いわゆる、「新古典派統合」が組立てられてきており、古典派理論とケインズ理論の斉合性への理解の努力が重ねられてきている。

ケインズの著作が完全にまとめられるまでには未だ時間を要するであろうが、前記三十巻の著作集によって、その主要部分は全てを尽くしているといえよう。

生涯を改めて回顧する作業と相並んで、その理論体の再吟味が試みられることが予想される。

本稿は、このような背景をふまえ、初期のケインズについて、その思考過程を跡づけ、それが、ケインズの後年の到達したものどのように関連づけられるかを考察するものである。

ケインズ思想または理論的成果を時期的にみると凡そ、三つの段階に分けられる。

第一段階（初期）は最初の著作が出た1913年から1922年頃迄で、四篇の著作に代表される。

- (1) Indian Currency and Finance, 1913.
- (2) The Economic Consequences of the Peace, 1919.
- (3) A Treatise on Probability. 1920.
- (4) A Revision of the Treaty, 1922.

- (1) The Collected Writings of John Maynard Keynes, 30 Vols. Royal Economic Society. Macmillan/Cambridge University Press, 1971~1989
- (2) Robert Skidelsky, John Maynard Keynes, Hopes Betrayed 1883~1920. 1986
// John Maynard Keynes, The Economist as Savior 1920~1937. 1992
D.E. Moggridge, Maynard Keynes. An Economist's Biography, Routledge, 1992
- (3) John Maynard Keynes, The General Theory of Employment, Interest and Money. 1936
- (4) W.カール・ビブン 誰がケインズを殺したか 1990. 日本経済新聞社
根井雅弘・ケインズの悲劇 1990. 日本経済新聞社

第二段階（中期）

- (5) A Tract on Monetary Reform, 1923.
- (6) A Treatise on Money, 1930.

第三段階（後期）

- (7) The General Theory of Employment, Interest and Money, 1936.

第二段階と第三段階の間及び第三段階後に次の著作が刊行されている。

- (8) Essays in Persuasion, 1931
- (9) Essays in Biography, 1933
- (10) How to Pay for the War, 1940
- (11) Two Memoirs, 1949

以上が段階的に刊行された生前の著作であり、その分量は前記著作集のほぼ五分之一に当たる。

本稿の考察範囲は第一段階であるが、そのなかでも、主として、(3)の「確率論」の成立の前後に焦点をあてる。

1 初期思想の背景

ケインズは、1883年6月5日、ケンブリッジ大学街の、ハーヴェイ・ロードで生まれた。父は、ジョン・ネヴィル・ケインズ(John Neville Keynes, 1852~1949)、母はフロレンス・エイダ・ケインズ (Florence Ada, 1861~1958) である。

この両親は、ケインズの思想形成に大きく力を与えていると見られている。

ネヴィル・ケインズはケンブリッジ大学で道徳哲学を講じていて、数学にも長じて、その著書である、Formal Logic (1884) はケインズの生まれた翌年に刊行されており、また、Scope and Method of Political Economy (1891) は、経済学方法論の基本書として、

1906年迄に、四版を重ねる程であった。母フロレンス・エイダもケンブリッジ市長を勤めるなど、その生き方は、当時の女性の群を抜くものがあった。こうした家庭のもと、ケインズは、1897年、14才で名門イートン校に入学する。そこで、古典学（ラテン語を主とする）と数学を学び、4年の在学中に早くも第6学年の課程を終える迄になっていた。基礎学科の他に哲学と美学の素養を身につけ、1902年ケンブリッジ、キングス・カレッジに奨学給費生として入学する。

ケンブリッジでは、アレフレッド・マーシャル (1842~1924) の尽力により、経済学部が創設された。ケインズが入学した翌年、1903年のことである。

マーシャルは父ネヴィルと親友で、ケインズは幼少の頃より、その家庭に出入りし、よく可愛いがられたという。しかしそうした空気のなかでも、ケインズの当座の勉学は古典、数学を中心とする基礎科目に集中されていた。

ケインズは、学年を進むにつれて、ケンブリッジ、ユニオンの会長に推され、単なる勉学にとどまることなく、弁論を通して、人間体験の巾を広げていった。またケインズは、ケンブリッジの秘密結社のクラブ「ソサエテイ」の会員となり、そこを通して、後年のケインズに大きな影響を及ぼす、重要な友人達を持つこととなる。

1905年、カレッジ終了とともに、数学トライポス（優等試験）を12番の成績で通り、本格的な研究の道を探ることとなる。

このとき、マーシャルは、ケインズに対して経済学研究に進むよう熱心に奨めたが、結局ケインズは、文官試験を受けインド省に勤めることとなる。1906年、23才の時である。ケインズがこのとき、実務に入るに当っては、

ケインズ自身独立自営の必要を感じたことからきたとみられる。というのも、カレッジを終えて生活の資が得られる、フェローの地位には少くともトライポスで一位の成績を保持しなくてはならず、ケインズはそれを逸していたからである。

インド省での実務は、一面ではインド関係の現実展開に開眼させられ、興味が高じていった反面、研究者乃至は教師就任への思いは絶ち難く、論理学及び数学の研究を継続していた。現実面への関心は、のちに処女作「インド通貨及び財政論」(1913年)につながっていくが、内面の主力を注いだのは、フェローの地位を獲得するための数学、論理学研究であった。

ケインズが学問と実務のさなかで格闘をしていた時期、学問の世界では注目すべき業績が出始めていた。1903年に刊行された、バートランド・ラッセルの「数学の原理」(Principles of Mathematics)であり、同年刊行のG.E.モアの「倫理学原理」(Principia Ethica)である。

ケインズが、数学・論理学研究の道程からテーマをしぼりこみ、「確率論」研究に打ちこむに至るには、この両書の示唆、影響が大きかったことが想像される。

2 ラッセルとモア

バートランド・ラッセル(Bertrand Ruesell, 1872~1970)は、ケインズに10才年長であり、24年も長く生きた。ラッセルはケンブリッジ・トリニティ・カレッジ在学中、ケンブリッジ・ソサエティの会員であり、十年程のち、ソサエティに入会したケインズは、その声咳に接していた。⁽⁵⁾

(5) Skidelsky: J.M. Keynes. Vol I. P. 124

ラッセルは数学研究とともに哲学を始め、広大な領域に関心を広げていったが、この時期1900年代の初頭は数学に没頭し、その成果は、この「数学の原理」とホワイトヘッド(A. N. Whitehead, 1861~1947)との共著「数学原理、Principia Mathematica, 1910~13)と⁽⁶⁾なって達成されていた。

数学は哲学的にどう観じられているか、当時までの見解は、論理主義、形式主義、直観主義の三つの原理論に分かれて成り立っていた。⁽⁶⁾

論理主義は、数理命題は論理学の基本命題=論理法則により演繹されるとする。形式主義は数理は論理命題に還元されるとする見解を否定し、それらは形式の表現体系であるとする。直観主義は人間の思惟の産物として数理を位置づけ、その思惟の正確な部分を数理とする。ラッセルは論理主義者と目され、ヒルベルトは形式主義者、ブラウワーが直観主義者とそれらの立場が理解されている。⁽⁷⁾

ケインズが、数学、論理学に打込む過程では、数学、数理論の本質について、これらの見解を辿り、論理思考を深めていったが、ラッセルの論理主義に傾いていく。

G.E.モア(George Edward Moore, 1873~1958)はケインズに9才年長であり12年も長く生きた。

モアは人間に関わる総ての命題について、明晰さと正確さを要求した。哲学の名のもとに思考究明されている問題についても、幾らかでも不明瞭であれば、それを論難し否定した。モアの主著である「論理学原理」Principia Ethica, 1903はこうした探究の姿勢を、善の論

(6) バートランド・ラッセル 「数理哲学序説」(岩波文庫)「解説」P. 271

(7) ラッセル「同書」P. 272

理、すなわち、“善とは何か”に向けたものである。存在とは何か、真理とは何かを問う哲学において、多くの議論が形而上学化するのには止むを得ないとしても、それが難解さをこねまわし、あげくの果ては曖昧になることを徹底して排するが、善の問題については、哲学の問題よりも、明晰さが薄いとして論理的に考究したのがこの書である。

ケインズは、こうした姿勢に深い関心をもつとともに、ラッセルを介し、またケンブリッジの身内というよしみもあってモアに学ぶことを深めていった。

モアはこの書の出版後、しばらく経て、ケインズの父ネヴィルのケンブリッジにおける道徳哲学の講座を引き継ぎ、その学業生涯の大部分を過ごすこととなる。

プリンキピアPrincipiaはラテン転形語で、究極の説明原理のことである。

プリンキピアの名のもとに、説明原理の最奥をきわめたものとしては、これまでに、三つを数えるのみである。ニュートンの「プリンキピア」。これはプリンキピア・フィジカと解される。次いで、ラッセル・ホワイトヘッドの「プリンキピア・マセマティカ」、そしてモアの「プリンキピア・エチカ」である。これら三者は奇しくも、ケンブリッジで育ち大成したものである。

ケンブリッジで青年期を過ごす学徒ケインズがその学問の基礎を築き端初を切り開こうとしたテーマは、これまでの学問的遺産を考慮に入れたものとなろう。

ケインズが取組もうとしたものは、こうした知的伝統、学問的遺産の延長にふさわしいテーマ「確率論」であった。

3 「確率論」研究一（一）

ケインズの数学トライポス（優等試験）は不本意の結果に終わり、数学への素質への限界をうすうす感じたようであったが、より広い範囲での論理学への関心は依然強かった。

1903年、ケインズ20才の折に、ケンブリッジに経済学部が創設され、経済学トライポスも設けられたが、ケインズは1906年、文官試験第2席でインド省に就職することとなる。就職とともに研究テーマとして、携えていたのが、確率論である。研究は実務のかたわら、1912年迄の6年間続けられることとなる。その間、生活上、そして職業上少からぬ変動が起った。

ケンブリッジ在学中にまとめあげた、指数に関する研究に対し1907年に、アダム・スミス賞が授けられた。翌1908年、長くその職にあったマーシャルは、席をピグーに譲ることとなり、それと前後して、ケインズがケンブリッジに呼び戻された。1909年、26才となったケインズは、Master of Artsを取得、キングズ・カレッジのフェローに選ばれ、貨幣論を担当することとなる。

この時から、ケインズの生涯は、くつきりと経済学研究の軌道に乗るようになり、特に貨幣研究では、めきめきと頭角を現わすようになるが、この推移については、ここで触れることを避け、先に志ざした、確率論研究に注目することとする。

論理学と倫理学についての関心は、ラッセルやモアの直接、間接の感化を受け、強く根づいていたが、それは又、ロック、ヒュームに代表されるイギリス経験哲学の大きな流れのなかで巾を広げていた。

もちろん、確率論を主題とするからには、

それまでにおける確率に関する考え方、文献をチェックする必要がある。それはむしろ数学の分野である。確率についての考え方議論の進め方が数理的になり、数式表現をもって行われるのは、18世紀後半からであり、ケインズの青年期には、それらの成果がうねりをもって高まってきたといえるだろう。

ケインズは、確率論についての、古今、内外の文献を渉猟した。「確率論」の巻末に付けられた文献目録にその一端がうかがわれる。

歴史的先駆者として、ケインズ自身がとり挙げているのは次の通りである。⁽⁸⁾

ライプニッツ (Leibniz 1646~1716)、パスカル (Pascal 1623~1662)、アルノー (Arnauld 1560~1619)、ホイエンス (Huygens 1629~1695)、スピノザ (Spinoza 1632~1677)、ジャック及びダニエル・ベルヌイ (Jakob Bernoulli 1654~1705, Daniel Bernoulli 1700~1782)、ヒューム (Hume 1711~1776)、ダランベール (D'Alembert 1717~1783)、コンドルセ (Condorcet 1743~1794)、オイラー (Euler 1707~1783)、ラプラス (Laplace 1749~1827)、ポワソン (Poisson 1781~1840)、クールノー (Cournot 1801~1877)、ケトレー (Quetelet 1796~1874)、ガウス (Gauss 1777~1855)、ミル (J.S.Mill 1806~1873)、ブール (Boole 1815~1864)、チエビチエフ (Tchebychef 1821~1894)、レクシス (Lexis 1837~1914)、ポアンカレ (Poincare 1854~1912) これら先学の著作を仏訳又は英訳によって目を通していたことは論の展開にそくして知り得る。

(8) Keynes, A Treatise on Probability, Bibliography by 1921. P 433

4 「確率論」研究一 (二)

1920年5月1日付の序文をもつ「確率論」は、466頁もの比較的長大な著作である。

目次を通して、内容の一端を読み取ることが出来ようが、何しろ、このケインズの「確率論」を完璧に読み通した人がいるかどうか疑わしいといわれており、内容を要約することは困難とされている。

第1部 (Part I)

基本的考え方 (Fundamental Ideas)

第1章 (Chapter I)

確率の意味 (The Meaning of Probability)

第2章 (Chapter II)

認識論からみた確率 (Probability in relation to the Theory of Knowledge)

第3章 (Chapter III)

確率の測定 (The Measurement of Probabilities)

第4章 (Chapter IV)

無差別の原則 (The Principle of Indifference)

第5章 (Chapter V)

確率が決定される他の方法 (Other Method of Determining Probabilities)

第6章 (Chapter VI)

議論の秤量 (The Weight of Arguments)

第7章 (Chapter VII)

歴史的回顧 (Historical Retrospect)

第8章 (Chapter VIII)

確率における頻度論 (度数論) (The Frequency Theory of Probability)

第9章 (Chapter IX)

第1部における建設的見解(理論)の要約 (The Constructive Theory of Part I. Summarised)

第2部 (Part II)
基本的定理論 (Fundamental Theorems)
第10章 (Chapter X)
序 (Introductory)
第11章 (Chapter X I)
群論、特に論理整合、推測、論理前提との
関連 (The Theory of Groups,with special
reference to Logical Consistence,Inference,
and Logical Priority)
第12章 (Chapter X II)
推測と確率の定義と公理(The Definition and
Axioms of Inference and Probability)
第13章 (Chapter X III)
必然推測の基本定理 (The Fundamental
Theorems of Necessary Inference)
第14章 (Chapter X IV)
確率的推測の基本定理 (The Fundamental
Theorems of Probable Inference)
第15章 (Chapter X V)
確率の数的計算と概算(Numerical Measure-
ment and Approximation of Probability)
第16章 (Chapter X VI)
第15章の定理の省察及び証明を含む展開
(Observations on the Theorems of Chap-
ter XIV,and their Developments,including
Testimony)
第17章 (Chapter X VII)
平準化を含む逆確率の幾つかの問題 (Some
Problems in Inverse Probability,including
Averages)
第3部 (Part III)
帰納及び類推 (Induction and Analogy)
第18章 (Chapter X VIII)
序 (Introduction)
第19章 (Chapter X IX)

類推による論議の性格(The Nature of Argu-
ment by Analogy)
第20章 (Chapter X X)
定項の加乗の意味又は純粹帰納 (The Value
of Multiplication of Instances, or Pure
Induction)
第21章 (Chapter X X I)
帰納論の性格について論議の続き (The
Nature of Inductive Argument continued)
第22章 (Chapter X X II)
これら方法の正当化 (The Justification of
These Method)
第23章 (Chapter X X III)
帰納論についての回顧的覚書 (Some Histori-
cal Notes on Induction)
第3部への覚書 (Notes on Part III)
第4部 (Part IV)
確率論に関する若干の哲学的応用
(Some Philosophical Applications of
Probability)
第24章 (Chapter X X IV)
客観的偶然と無作為の意味 (The Meaning of
Objective Chance,and of Randomness)
第25章 (Chapter X X V)
偶然に関する議論から派生する問題 (Some
Problems arising out of the Discussion of
Chance)
第26章 (Chapter X X VI)
確率の行為への適用 (The Application of
Probability to Conduct)
第5部 (Part V)
統計的推測の基礎 (The Foundation of Sta-
tistical Inference)
第27章 (Chapter X X VII)

統計的推測の性格 (The Nature of Statistical Inference)

第28章 (Chapter XXVIII)

大数の法則 (The Law of Great Numbers)

第29章 (Chapter XXIX)

統計的頻度の予測について先駆的確率の適用—ベルヌイ、ポアソン、チェビチエフの各定理 (The Use of a priori Probabilities for the Prediction of Statistical Frequency—The Theorems of Bernoulli, Poisson, and Tchebycheff)

第30章 (Chapter XXX)

経験的確率の決定のための統計頻度の数学的利用—ラプラスの方法 (The Mathematical Use of Statistical Frequencies for the Determination of Probability a posteriori—The Methods of Laplace)

第31章 (Chapter XXXI)

ベルヌイ定理の転換 (The Inversion of Bernoulli's Theorem)

第32章 (Chapter XXXII)

経験的確率の決定のための統計頻度の帰納的利用—レクシスの方法 (The Inductive Use of Statistical Frequencies for the Determination of Probability a posteriori—The Method of Lexis)

第33章 (Chapter XXXIII)

建設的理論の概括 (Outline of a Constructive Theory)

エジプト、ギリシヤ、バビロニアの昔から行われてきた、さいころによるゲーム。その結果を法則的に捉えようとする試みの成果としての確率論、確率論の数学的展開。このような流れを踏まえ、人間の知及び行動における確率の領域 (domain) を認めながら、然し、そのdomainが総て数理的確率で律しられるこ

とにケインズは疑問を持ち問題を提起する。つまり、確率の理解には、数学的理解と論理的理解の二局面が在るとする。ケインズの問題提起までに展開された確率論は、数学的理解を基礎に、数理的確率そのものの実在を主張することで完結するとして、もう一方の確率の論理で探究すべき側面を無視してしまっているとするのである。伝統的確率論による数学的展開は客観的確率論 (Theory of Objective Probability) と呼ばれ、ケインズによる問題指摘の側面は主観的確率論 (Theory of Subjective Probability) と呼ばれるようになった。

客観的確率論は、数学の一分野としての展開を遂げるとともに、人口推計、保険の生活への浸透、産業及びエンジニアリングなどにおける統計方法の有効な応用を背景に、統計理論に飛躍的な応用を見た。その結果、ケインズが指摘する、主観的確率論は多くの場合、その意義が軽視され勝ちとなった。

ケインズの確率論を真正面から本格的に取上げた数学者に、F.P.ラムゼイ (Ramsey 1903~1930) が居るが、彼は統計学者、数学者による客観的確率論と、論理的に考究しようとしている主観的確率論は、各々別の主題を論じているとして、その整理再考を進めようとした。一方は誤差の計測数値化や観察結果の分布を考究しようし、他は観察又は認識における確実さや曖昧さを問題にしようとするというのである。ラムゼイは確率に関する基本的前提の省察のうえに全体を包含する確率論を数学的論理的に樹立しようとするが、37才の早い逝去の為それを果すことができなかった。⁽⁹⁾

(9) F.P.Ramsey, Truth and Probability in The Foundations of Mathematics, 1931.

ケインズは、この若き友人の批判に耳をかし、ラムゼイの説得力を賞賛したが、自説に固執した。

5 「確率論」研究－(三)

ケインズによる「確率論」研究は、ケインズ自身による経済学研究というライフワークの選択と、論理哲学研究環境の移り変りが相まって、棚上げされたかっこうになった。

経済学研究にはいるといっても、当時の現実社会状況は、ケインズの力量を学窓にとどめ置くことを許さず、第一次世界大戦(1914～1918)の内外経済事後処理にかりたてていく。

また、Royal Economic Societyの機関誌、*Economic Journal*の編集に1911年より携わることとなり、論理学研究からますます遠ざかる。

ケインズの「確率論」研究が、確率論研究史のなかで、重要な一石であることは確かであるとしても、それが学界に受け継がれることなく、等閑視されてきたことは惜しまれて然るべきであろう。

客観的確率論は、1930年代になってから、その数学的基礎論、統計推測のためへの理論、応用の面で長足の進歩を見、現在に至っている。

論理的(又は主観的)確率論は、その後別の哲学研究の成果から例えば、ルドルフ・カルナップに見られるように、幾つかの兆しが見られるが、客観的確率論のような隆盛はない。⁽¹⁰⁾

近代確率論の創始者であるラプラスは、「我々

が知っているのは些細であり、知らないことは膨大だ。What we know is very slight what we don't know is immense」と述べているが、ケインズは、まさに此の言葉の如く、知識の正確さ、完全さに到達するために、確率の考究に青春の全力を投入したといえよう。

ケインズは、その「確率論」の叙述を閉じるにあたって、「現在の統計理論を否定するものではないが、それにたずさわり探究している者の多くの“論理の貧困”を指摘したいと述べている⁽¹¹⁾ことは、未だに確率論の論理的考究の必要を示唆しているのではなからうか。

6 いわゆる「ケインズ問題」

経済学説史上、ふたつの巨大問題があるとされる。ひとつは、いわゆる「アダム・スミス問題」であり、他はいわゆる「マルクス問題」である。ふたつとも、各々スミスとマルクスの初期思想形成と円熟期思想との関連が問題となっている。

アダム・スミス(1723～1790)の「国富論」(1776)は、近代経済思想の源泉として不滅の地位を占めているが、スミスの学者としてのスタートの科目は、文法修辞学であり法学であり、倫理学であった。「アダム・スミス問題」では特に初期著作の「道徳感情論」*Theory of Moral Sentiments*(1759)と「国富論」の間に結びつく関連性があるかどうか、が関心の対象となり、それぞれの著作の形成過程に分析がなされている。

またマルクス(1818～1883)の場合、その「資本論」(第1巻1867、第2巻1885、第3巻1894)は、近代経済及び社会の基本構造を解明し、19世紀、20世紀の根本思想に多大の影

(10) Rudolph Carnap, *The Logical Foundations of Probability*. 1950
G.H.Von Wright, *A Treatise on Induction and Probability*, 1951

(11) Keynes, *A Treatise on Probability* P428

響をもたらしたものとして高く評価されているが、マルクスの初期の関心分野である、プロイセン法律問題、キリスト教神学問題、ヘーゲル・フオイエルバッハ研究などどのような関連が存するか、といういわゆる「マルクス問題」があるとされる。

人間、個々人の思想形成の連続性と断続性については、思想史形成の観点から、数多くの問題が提起され研究成果が示されてきているが、経済思想史、学説史上、スミス、マルクスの問題など多数、多面的に捉えられている例はそう多くない。

ケインズの経済思想が、20世紀経済思想及び経済学に与えた影響は甚大なものがあるが、その経済思想は、主としてケインズの中期、後期の思索、特に1936年刊行の「一般理論」である。

はじめにも触れたように、ケインズの初期においては、「確率論」研究と、インド貨幣財政研究及び第一次大戦戦後経済の2局面の成果がある。このうちのとりようによっては全く異質の「確率論」及び論理学研究は、後期の「一般理論」とどう結びつくか、これがいわゆる「ケインズ問題」となる。

ケインズはその「一般理論」において、一ヶ所「確率論」に言及している。⁽¹²⁾

「われわれが期待を構成するにあたって、きわめて不確実なことがらを大きく評価することは愚かなことであろう」と述べ、不確実なこと、という所で特に註記して述べている。「きわめて不確実 (very uncertain) ということを私は“確からしさのきわめて小さい”(very improbable) ということと同じものとは解しない。私の「確率論」第6章「議論の秤量」参照。」

これから類推し得ることは、「一般理論」の叙述は、その細部において、「確率論」で考究展開された論理学研究が、濃淡の差はあれ、裏打ちされているということであろう。

「一般理論」は、他の経済学著作、一ケインズ自身のもの、そしてケインズ以外を含めて一と比べて難解とされている。ケインズの思考は財政政策の効用、経済のマクロ分析への寄与等々、近代経済理論への革新的な貢献ばかりではなく、近現代の経済及び社会の読み取り方に、未発掘の含蓄ある寄与が数多く存すると思われる。

「ケインズ問題」についての、思想史的、経済学的アプローチが高まりつつあると思われるこの時点において、ケインズ初期⁽¹³⁾についての研究はより深められねばならない。

(12) ケインズ「雇傭、利子および貨幣の一般理論」邦訳165頁

(13) Athol Fitzgibbons, *Keynes's Vision, A New Political Economy*, Oxford, Clarendon Press, 1988
Piero V. Mini, *Keynes, Bloomsbury and the General Theory*, Macmillan, 1991
R.M. O'Donnell, *Keynes: Philosophy, Economics and Politics The Philosophical Foundations of Keynes's Thought and their Influence on his Economics and Politics*. Macmillan, 1989